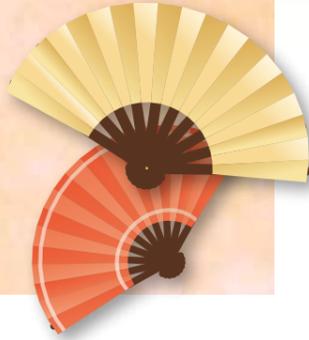




宮城教育大学
小塩さとみ教授
音楽教育講座教授、博士(人文科学)。専門領域は音楽学で、日本の三味線音楽やベトナムの伝統音楽をおもな研究対象とし、東日本大震災以降の音楽活動についての調査も実施されています。

今と昔、そして 人と人をつなぐ 伝統の調べ

伝統音楽や伝統芸能というと、なんとなく敷居が高く感じられるのではないのでしょうか。しかし、元々は私たちが古来より親しんできた、とても身近なもの。そんな伝統音楽・伝統芸能の魅力「音楽学」の視点から、小塩さとみ教授にお話ししていただきました。



「音楽学」とはどのような学問ですか

一言で言うと、「音楽とは何だろう」ということを考える学問です。私たちが普段聴いたり、演奏したりしている音楽について、どのような歴史があるのか、他にどんな音楽があるのか、それぞれどんな特徴があるのかということをお話しています。また、現代における伝統音楽や伝統芸能の伝承についての研究もおこなっています。

伝統音楽を研究テーマとされていますが、関心を持ったきっかけを教えてください

子どもの頃はピアノや合唱など西洋音楽に親しんでいて、ほとんど日本の伝統音楽について知りませんでした。大学に入学したときに三味線のサークルがあったので、珍しい楽器だからやってみようと思ったのが、日本の伝統音楽に触れる第一歩でした。最初は小さい頃からなじんでいた西洋音楽について研究するつもりでしたが、三味線を始めて自分は日本の伝統音楽のことを何も知らないと感じ、詳しく学びたいという気持ちになりました。そして、卒業論文で三味線をテーマにして書いたことが今に至るきっかけです。

西洋音楽から三味線へ、大きな方向転換だったのですか

最初は日本の音楽は不思議だと思うことばかりでした。三味線には「サワリ」という、雑音のような特有の音色があります。三味線を始めたばかりのときはそのことを知らず、西洋音楽に慣れた耳でしたので少しうるさく感じました。そこでサークルの先生にサワリの音が出ないようにしたいと言ったら、「これは三味線にとって非常に大事な音なのだから、この音を良いと思えるようになりなさい」と笑われてしまいました。日本人は澄んだ綺麗な音よりも、少し雑音があるほうが心地良いと感じるという感覚の違いがおもしろいと思います。

伝統音楽・伝統芸能の魅力とは

昔の人たちの感性を、今の私たちも共有して楽しむことができるのが伝統音楽・伝統芸能の魅力です。音楽が生まれた当時の美意識や音の感覚などを体験できます。雅楽を聴き、もしかしたら平安時代の人も同じ気持ちになったのかもしれないとか、歌舞伎を観て江戸時代の人も今の私たちと同じように喜んだり、泣いたりしたのだというように、時代の離れた人のことがリアルに感じられることも大きな魅力ではないでしょうか。特に歌舞伎には、嫌な上司に腹を立てたり、男性が失恋して泣いたりするなど、現代人の私たちも共感するところが多くあります。「伝統」として括ってしまうと、今とは関係のない昔のものだと考えがちですが、つながる道を探してみると楽しめると思いますよ。そして、伝統音楽や伝統芸能を自分で実際にやってみると、私たちの言葉使いや体つき、生活の中での所作などと結びついていると感じます。例えば盆踊りなどは誰に教わらなくても、見よう見まねで踊れる方が多いと思います。しかし、国際学会に参加した際に海外の方と盆踊りをする機会が

あったのですが、海外の方々は踊り方を教えても上手に踊ることができなかったのです。そのときに伝統音楽や伝統芸能というのは、その国の人たちの体つきや生活に深いつながりがあるのだということに、驚きとともに気付かされました。

子どもが楽しめる伝統音楽・伝統芸能はありますか

例えば仙台市の能-BOXでは夏に「こどものための能講座」が開催されています。私も発表会を見に行ったのですが、4歳から15歳ぐらいまでの子ども達が、1週間のお稽古の成果を発表していました。大人だと初心者は何ヶ月も練習しないと覚えられないそうです。すぐに覚えてしまうのは子どもだからできる芸当だと感じました。それに人前で何かを演じることに責任感も幼いながらにしっかりと持っていて、みんなきりっとした表情で堂々と演じるのがとても印象的でした。子どものためのこのような催しは最近増えてきていますので、興味が湧いたものにぜひ参加していただきたいですね。お母さんも一緒にやって、お母さんと子どもがともにできるようになっていくというのも一つの楽しみ方だと思います。

宮城に縁の深い伝統音楽・伝統芸能について教えてください

東北は民俗芸能の宝庫です。宮城にもたくさんの民俗芸能があります。私は仙台市教育委員会の方々と協力して秋保田植踊(あきうたうえおどり)という民俗芸能を調査しました。元々、小正月に豊作を祈願して演じる芸能だったのですが、今では春に神社やお寺で奉納されています。苗を植えたり、泥をならしたりという田植えの所作がそのまま踊りになっているのが特徴です。かつては多くの集落で盛んにおこなわれていたのですが、だんだんに生活が都会化していき、現在は秋保地区では3つの集落だけになってしまいました。小学生の子ども達が早乙女(さおとめ)と弥十郎(やんじゅうろう)という役で踊りを踊ります。せっかく現在まで残ってきたのですから、次の世代にもぜひ受け継がれて欲しいと思っています。

震災以降の音楽活動についても調査されていますが、印象深かったことはありますか

東日本大震災という未曾有の災害を受け、そんな中で音楽がどう演奏され、どんな役割を果たしたかということは音楽学を研究する者として見ておかなければならないと感じました。調べてみると本当に多くの地域で、様々な形で音楽活動がおこなわれていました。避難所で子どもたちが合唱曲を歌ったという地域や、神輿も神社も流されたけれど、それでも神様に奉納したいと言って、春祭り

のために自分たちで簡単な神輿を作り、それを担いで周ったという地域もありました。東京などでは多くのチャリティーコンサートが開かれていましたよね。音楽には遠くの人たちをつなぐ役割があります。けれども、一方で、その地域にしかない伝統音楽は、地域のコミュニティを復活させ、地域の人をつなぐという非常に大事な役割を果たしています。子どもの頃からその地域で親しまれている音楽を聴いて元気になったという人もいます。その人の人生の中での様々な体験が、音楽を通して力となって出て来ることなのだと思います。調査した中で特に印象に残った例を挙げると、石巻の大室地区では20~30代の若い人たちが中心となり、地域の民俗芸能である大室南部神楽を復活させました。幼い頃に子ども神楽を体験した若い人たちが、長老の方々をお願いして神楽をもう一度一緒に練習し、震災から2年後の2013年の5月に復活祭を開催したのです。それを見た子どもが自分たちもやりたいと言って練習を始め、翌年には子ども神楽も復活しました。今年の4月には東京の国立劇場の民俗芸能公演で演じることが決まりました。震災をきっかけに活動が盛んになったのです。大室南部神楽だけではなく、東松島の大曲浜獅子舞なども若い人たちが活動の継続に積極的だったと聞きました。伝統音楽や伝統芸能というのは年配の人たちだけが大事にしているだけを受け継がせていこうとしているのではなく、むしろ若い人たちが次世代につなぎたいという気持ちを強く持っているのだと実感しました。

最後に、先生ご自身の伝統音楽への取り組みを教えてください

大学では学生たちに授業の中で伝統音楽を体験する機会を多く作るようにしています。また、週に一回「自主授業」という名前で三味線も教えています。また大学の公開講座では、一般の方に三味線の基礎を教える講座を開催しています。三味線の持ち方から始める初歩的な内容です。今年も秋に開催するので、興味のある方はぜひご参加ください。



昨年9月に開催された公開講座「体験講座 三味線入門」の様子

